東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

近代日本音楽資料集(I)：長唄歌曲審議会発行「長唄定本改訂歌詞集」について

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1979-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/634

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

近代日本音楽資料集（I）

長唄歌曲審議会発行「長唄定本改訂歌詞集」について

茂手木　潔子

私の手元に、今、一冊の本がある。「長唄定本改訂歌詞集」と表紙に書かれ、出版は昭和十四年である。その二年前昭和十二年七月に支那事変勃発し、これを契機に我国の軍事行動は、ますますエスカレートし、ついに昭和十六年の第二次世界大戦を引き起すことになる。国民生活も、戦時体制の中でことごとく統制され、昭和十二年に始まる国民精神総動員運動の名の下に、一切の自由主義的な思想が反国家思想として厳しく断圧された。そのような中で文化面を扱う官庁としての情報局が内閣に設置され、芸能の興業・演奏を断圧し始めることになる。当局は、とかく遊惰に流れがちな芸能は戦意を高めるうえに不適当であるとし、この方向を健全な面へ向けようと考え、彼等が鄙猥と考える文章を時局に適合する歌詞に直そうとした。歌舞伎の台本は至る所検閲の印で白紙を粘られ、豊後系の浄瑠璃・常磐津や清元は時局にふさわしくない内容を扱っているとして急激に演奏を制限された。このような背景のもとにこの改訂歌詞集が世に出たわけである。

この本の歌詞改訂協力者氏名を見ると、当時の長唄会の指導者がほとんど名前を出している。現在は故人となられた方が大部分であるが、その芸名を継承しておられる何人かに実際に話を聞いてみることにした。まず現在の福原百之助氏（協力者の実子）によると「お父上の時代であったために詳しくは記憶していないが、確かに本を出したことはおぼえている。確か第二集まで出したのではなかったか。それも長唄だけがこのような本を印刷し、他の浄瑠璃（常磐津・清元）は上演することすら禁止された。軍部の命令によって出されたものであり、そうでなければ演奏家がわざわざこのような本を時間をかけて作るはずがない。現在の今藤長十郎氏（協力者の実子）ならば、もう少し詳しい事情を知っているはずである」ということであったので、ごめいわくを顧みず、今藤宅へ深夜におしかけたところ、非常に詳しいお話を伺うことができた。その頃お父上の身体の具合が悪かったために、審議会への出席は当時二十五才の氏が替わって出席したとのことで、会の内容を詳しくお聞きできたことは幸いであった。以下、氏の話を記すと、

『当時は、浮世絵の長じゅばんの下から出ている足でも卑猥だとして塗りつぶしたような時代であった。したがって、現在では何も問題のない言葉でも、ことごとくクレームがついたので、長唄界では情報局の命

令により、急きょ長唄歌曲審議会を作り、各曲ごとに歌詞の訂正を行い、歌詞集を出版することを余儀なくされた。この歌詞集は歌詞全部が載っているものであり、その歌詞集の抜粋で、訂正部分のみを載せた改訂歌詞集はいわば普及版として出版されたものである。長唄歌曲審議会という団体も、この目的にのみ集め作られたものであるから、他の仕事は行っていない。また列記されている歌詞改訂協力者氏名についても、当時の幹部を並べたにすぎず、一つの権威付けと考えられる。もちろん、実際に協力した人々もいるが、私（今藤氏）も佐々木信綱氏に会っているし、二～三度会議に出席した記憶がある。委員の杵屋佐吉氏あたりが中心であったのではないかと思う。

しかし、前述のように常磐津や清元が、内容に男女の恋愛を扱った詞章を多く持っていたために、演奏自体を禁止されたことに比べ、長唄は、まだ内容が多種であり、歌舞伎の重要な部分を占めていたことと、演奏者人口が非常に多かった点で、当局から指摘されるものが少なかったことは幸いであった。

情報局の訂正の対象となった歌詞は、二種類であった。第一に、男女の恋愛場面を示唆する部分。第二に、天皇の名前に関する部分である。後者の場合、天皇の実名を口にすることすら恐れ多いことであるのに〈吉原雀〉のように実在もしない「光正天皇」などという天皇名を詞（ことば）にするなど、もってのほかだというわけである。〈舟弁慶〉の詞章中の安徳天皇を抱いて入水する部分が否定されて歌詞を変えたこともあったという。また、どうしても歌詞の改訂がうまくいかない場合には、三味線だけで弾いて、黙っていたこともあった。舟弁慶の「主上を始め奉り」の部分である。

この歌詞の改訂の典拠となったものが、江戸末期、歌詞に品位を与えようと、根岸の勘五郎によって改訂された歌詞である。したがって、改訂歌詞の中には二種類あって、長唄歌曲審議会で改訂した歌詞と根岸の勘五郎が改訂して後、演奏家の中にかなり定着していた歌詞をそのまま用いたものとである。例えば〈外記猿〉や〈晒女〉は勘五郎改定のものを、改訂歌詞として採択している。

では、この改訂歌詞が長唄の演奏家の中でどの程度徹底したか、というと、ほとんど用いられなかったことが実情である。今藤氏自身、審議会に出席していたものの、演奏では全くこの改訂に従わなかったという。他の演奏家達も、演奏の折々に検閲されるわけではなかったから、ほとんど用いなかったようである。また、ただ家元中心に配布された歌詞集では、町々の師匠さんまで徹底するのは不充分であったし、徹底させるためには、終戦までの五～六年ではあまりにも短すぎたわけだ。

この改訂歌詞集は、審議会によって第二輯まで出されていたらしいという話を、福原百之助氏からお聞きした。しかし、実際にはまだ第二輯を見ていない。今藤氏によると、〈舟弁慶〉の前述の歌詞「主上を始め奉り」の改訂をした記憶があるが、第一輯に載っていないことから考えると、第二輯も出版されたか、もしくは出版される予定であったはずだと言う。

現在、この改訂歌詞はほとんど原詞にもどっている。その理由は、徹底が不十分であったこと、舞踊の伴奏曲の場合、歌詞を変えると舞踊の意味がなくなってしまうこと、やはり歌いづらかったことなどであろ

う。現在も改訂歌詞のまま歌われているものは全て勘五郎の作詞のものである。それは、〈初時雨〉（部分的に、審議会で作った歌詞が以前の勘五郎の詞にもどされている）、〈供奴〉、〈外記猿〉、〈晒女〉、〈廓丹前〉の「いとしけりゃこそ……」の部分である。他はすべて原詞にもどっている。』

今となっては五十才代以上の長唄演奏家のかすかな記憶にのみ残るこの「長唄定本改訂歌詞集」であるが、日本伝統音楽の昭和史にとって重要な文献である。（本学講師＝近世日本音楽史担当）

長唄定本

改訂歌詞集

第一輯

本集は現時局に際し、皇道精神に順應し、興亞體制の思想上、長唄としても、總ての歌詞を審査檢討し、必要あるものは之を改訂する爲め、關係官廳の御了解を得、且御後援の下に、新に長唄歌曲審議會を設け、顧問委員を委囑し、詳細審議研究し、去る六月二十八日別項協力者各位の參集を乞ひ、第一回改訂案を決定、次いで去る九月十日第二回改訂案を同じく決定し、茲に改訂歌詞五十曲を得たので、これを長唄定本改訂歌詞集第一輯として上梓いたした次第であります。

歌詞改訂に就いては、專ら原文を尊重し、三絃の手は絶對に變更せず、歌詞の發音に對しても意を用ひ、出來るだけ類似發音の文章を使用いたしました。

尙本集に載錄されて居ります改訂歌詞は來る昭和十四年十一月一日より實施する事に決定して居ります。依つて同日以後は一切改訂歌詞に據られねばならぬのであります。

歌詞改訂協力者氏名（同門別イロハ順）

今藤長十郎　松永和風　杵屋勝五郎　望月長太郎

岡安喜三郎　松永和三郎　杵屋勝吉

岡安喜千三郎　松島庄十女　杵家彌七　顧問 文學博士 佐佐木信綱

堅田喜惣治　福原鶴三郎　杵屋五三郎　委員 佐佐木信綱

堅田喜三郎　富士田吉治　杵屋佐次郎　渥美清太郎

柏伊三郎　富士田新藏　杵屋佐三郎　高澤初風

芳村孝三郎　坂田仙八　杵屋榮藏　長井金升

芳村伊四郎　杵屋六三郎　杵屋榮二　杵屋佐吉

吉住小三郎　杵屋長四郎　稀音家淨觀　杵屋勝太郎

吉住小三藏　杵屋寒玉　稀音家和三郎　福原百之助

吉住小四郎　杵屋六左衛門　杵屋正治郎　幹事 杵屋宇太藏

梅屋勘兵衛　杵屋彌三郎　望月長之助　池田鋏之助

梅屋金太郎　杵屋勝三郎　望月太左衛門

田中傳左衛門　杵屋和吉　望月太左吉

長唄定本

改訂歌詞集第壹輯曲目

初時雨　高砂丹前　都鳥　五郎
羽根の禿　外記猿　雛鶴三番叟　新柱建
供奴　秋色種　鳥羽繪　花の友
若菜摘　明の鐘　紅葉狩　たぬき
巽八景　喜撰　僧正遍照　千代の壽
黑髪　四季の山姥　藤娘　角兵衛
菖蒲浴衣　正札附　亂菊枕慈童　兩國八景
汐汲　二人椀久　傀儡師　俄かしまをどり
娘道成寺　初子の日　田舍神子　花車
三曲糸の調　末廣狩　蜘蛛拍子舞　まくら獅子
淺妻船　濱松風　晒女　今樣春駒
傾城蓬萊　伊勢音頭　里の四季
吉原雀　月の巻　廓丹前　座頭

審議の結果改訂なき曲目

井筒業平　お七吉三　土蜘蛛　文ぐるひ　里の四季　時雨西行
犬神　大森盛長　業平富士の雪　鞘当石橋
十六夜小原女　楠公小鍛冶　五月雨新石橋
今様望月寒山拾得　娘七種　五條橋　三國妖狐物語　執着獅子
茨木勸進帳　六玉川　五大力　狂亂雲井袖　四季の花里
春雨傘門傾城　靱猿　五色の糸　紀文大盡　四季の詠
八犬傳鏡獅子　浦島越後獅子　喜三の庭　四季の里
春の調横笛　有喜大盡　江の島岸の柳　一人椀久
花見踊夜の雨　梅の榮　手習子　由縁の月　瓢箪鯰
橋辨慶醉猩々　範頼淡島　夢の玉菊　望月
鉢かつぎ姫　高尾懺悔　軒端の松　安宅松　みめより百夜車
木賊刈多摩川　狂獅子　吾妻八景　みやこ鶯　桃太郎
常磐の庭高尾　鞍馬山　雨乞其角　都の錦　西王母
筑摩川勝三郎連獅子　松の緑　朝比奈　舌出三番叟　助六
竹生島正治郎連獅子　松の翁　相生獅子　松竹梅　角田川
老松土蜘二ッ巴　猿舞　賤機帶　秀郷
織殿鶴龜船揃　櫻狩　忍車
翁三番綱館　風流陣　鷺娘　新浦島

但　唄本に依り多少の差異あれば右曲目中にも訂正す可き個所あるものあり。

國禮廳
朝日新聞ノモノ

長唄歌曲審議會改訂
文學博士 佐佐木信綱校閲

長唄
定本

改訂歌詞集

第一輯

初時雨

原文　可愛々々と引きしめて、互ひに肌をぬくめ鳥、鴛鴦の衾に思ひ寝の、室の初花下紐解けて、それから結ぶ夢見草。

改訂　可愛々々の女夫雁、互に誓ふ鳥さへも、鴛鴦の劒羽思ふ間に、室の初花つい開き初め、荘子が蝶の夢見草。

羽根の禿

原文　戀の種、蒔き初めしより色と言ふ、言葉はいづれ此さとに。

改訂　春の色、たち初めしより花と言ふ、櫻はいづれ此里に。

原文　戀の諸分や手管の譯も、教へさんした筆の綾。

改訂　いろは書く手や便りの文も、教へさんした筆の綾。

供奴

原文　おはもじ乍らさる方へ、ほの字とれの字の謎懸て、解かせたさの三重の帶、解て寢た夜は免さんせ、アゝまゝよ浮名がどう成ろと。

改訂　おはもじ乍らさる方へ、はの字となの字の謎懸けて、開かせたさの八重一重、解て嬉しき下蔭に、アゝまゝよ浮名がどう成ろと。

原文　ねぢ切おいどが眞白で。

改訂　ねぢ切からげた千鳥足。

若菜摘

原文　女御安子の奉る。

改訂　女御かしこみ奉る。

巽八景

原文　いつか二人が仲町に、しつぽり濡る夜の雨、堅い石場の約束に、はなしは積もる雪の肌。

改訂　いつか二人が仲町に、しつとり更ける夜の雨、堅い石場の約束に、話は積もる雪の道。

黒髪

原文　黒髪の、結ほれたる思ひには、解て寢た夜の枕とて、一人ぬる夜の仇枕。

改訂　黒髪の、結ほれたる思には、解て願を松山に、ひとり見る夜の十寸鏡。

菖蒲浴衣

原文　青簾、川風肌にしみ〴〵と、汗に濡れたる枕がみ、鬢のほつれを簪の、とどかぬぐちも惚た同士、命と腕に堀きりの、水に色あるはなあやめ。

改訂　青簾、川風肌にしみ〴〵と、夢も涼しき枕橋、浮いた鳥居を三圍や、白髭かけて好いた同士、上ればやがて堀切の、水を彩る花あやめ。

汐汲

原文　逢た其時やつい轉寢の、帶も解いでそれなりに、二人が裾へ狩衣を、掛てぞ頼む睦言に。

改訂　逢はぬ其夜はつい思ひ寢の、夢をたよりてそれなりに、二葉の松へ狩衣を、かけてぞ頼むねぎ言に。

道成寺（京鹿子娘道成寺）

原文　出雲の神様と、約束あればつい新枕。

改訂　出雲の神様と、約束あればつい打ちつけな。

三曲糸の調

原文　翠帳紅閨に、枕ならぶる床のうち、なれしふすまの夜すがらも。

改訂　翠松紅葉に、眺め久しき窓の月、馴れし衾の夜すがらも。

淺妻

原文　すまぬ口舌の云がかり、背なか合せの床の山、此方向せて引寄せて、つめつて見ても漕船の、あだし仇浪浮氣づら、誰に契りを交して色を、かへて日影に朝顔の、花の桂の寢亂れし、枕はづかし辛氣でならぬえ。

改訂　すまぬ恨みの言ひがかり、瀬田に粟津の鳥籠の山、心堅田の浮御堂、願うて見ても漕ぐ船の、あだし仇浪浮氣綱、誰に誓ひを交して色を、かへて日影に朝顔の、花の葛や唐崎の、まつは恥し辛氣でならぬえ。

傾城

原文　鶏の啼まで待せて置て、何所の女郎めと、しげりくさつていたづらな。

改訂　鶏の啼くまで待せて置て、何處の其處のと、浮れ浮れていたづらな。

原文　叩く水鶏にだまされて、枕も取ぬ蚊帳の中。

改訂　叩く水鶏に騙れて、團扇も取らぬ蚊帳の中。

吉原雀

原文　凡そ生けるを放つこと、人皇四十四代の帝、光正天皇の御宇かとよ、養老四年の末の秋、宇佐八幡の託宣にて。

改訂　凡そ生けるを放つこと、人皇四十四代の御代かとよ、萬民睦じく孝有て、養老四年中の秋、宇佐太神の託宣にて。

原文　今も戀しき一人住み、小夜の枕に片思ひ。

改訂　今も戀しき一人住み、小夜の寢覺に片思ひ。

原文　はや盃持つて來た、とこへ靜にお出でなさんしたかえ。

改訂　はや盃持つて來た、其處へ靜にお出でなさんしたかえ。

原文　一焚くゆるなかうどの。

改訂　一焚くゆる名香の。

高砂丹前

原文　ねぐらに殘る仇まくら。

改訂　ねぐらに殘る仇情。

外記猿

原文　としも二八の戀ざかり、内の子飼の久松と、しのび〳〵に寢油を、親達ゆめにも白絞り。
（舞踊の場合は原文通りにて、たゞ寢油を「かく文」と改むる事）

改訂　いとけなきより手習を、内の子飼の久松と、共に學の怠らぬ、中を餘所目の仇口に。

秋色種

原文　とめつうつしつむつごとも。

改訂　とめつうつしつ六の緒も。

明の鐘

原文　宵は待ち、そして恨みて曉の、別れの鶏と皆人の、憎まれ口な、あれ啼くわいな、聞かせともなき耳に手を、鐘は上野か淺草か。

改訂　宵は待ち、そして白みて曉の、初音の鳥か皆人の、心も空にあれ啼くわいな、聞かせともなき耳に手を、鐘は上野か淺草か。

替唄　うめさくら、さては霞か日にそへて、のどけさまさる春の空、うぐひすさへもあれなくわいな、思ふ友どち袖つれて、いざや遊ばん野に山に。（穂積博士改作）

喜撰

原文　なぜほれさせたこれ姐え。

改訂　なぜ迷はせたこれ姐え。

原文　ヤレ色の世界に出家をとげる。

改訂　ヤレあぢな世界に出家をとげる。

原文　夕の口舌の袖の移り香。

改訂　夕の圍の袖の移り香。

原文　二世の契は平等院とや。

改訂　似せの契は平等院とや。

原文　釋迦牟尼佛の床急ぎ、抱いてねはんの長枕、むつごとがはりのお經文。

改訂　釋迦牟尼佛の御說法、聽いて涅槃の長談議、松風がはりのお經文。

原文　忍ぶ戀には如來まで。

改訂　忍ぶ戀には未來まで。

原文　こがねの肌で有難や。

改訂　こがねの光で有難や。

原文　お寢間の伽をまけにして。

改訂　お居間の良いをまけにして。

四季の山姥

原文　比翼のござに。

改訂　敷寢の蓙に。

正札附

原文　ふとん重ねてしきたへの、枕の土俵けしやうがみ、まぶに逢ふ夜の力みづ、もらさぬなかの文ずまひ。

改訂　更けて鐘さへ白雪の、枕邊寒き化粧冷え、松を便りの力草、洩らさぬ胸の文ずまひ。（相撲）

二人椀久

原文　小袖にひたと抱き付き。

改訂　小袖にひたと寄添ひて。

原文　一重二重や三重の帶、ふとんの中ぞ候かしく。

改訂　一重二重や三重襷、緣の糸ぞ候かしく。

初子の日

原文　こゝろの帶は何時の間に。

改訂　こゝろの底は、いつの間に。

末廣狩

原文　けふも又戀の奴のお使か、返事まつ戀しのぶ戀。

改訂　けふも又ふみを奴のお使か、返事まつ宵しのぶ宵。

濱松風

原文　しめてねまつと二葉の松の。

改訂　せめて根上り二葉の松の。

原文　松に添ひ寝の蔦かつら。

改訂　松にしがらむ蔦かつら。

蓬萊

原文　しげりて深き床のうち。

改訂　しげりて深き庭のうち。

原文　あぢな氣になる花の色。

改訂　言はでなまめく花の色。

月の巻

原文　米が十分いろ事も。

改訂　米が十分とり入れも。

都鳥

原文　みだれ合うたる夜もすがら。

改訂　流れ合うたる夜もすがら。

雛鶴三番叟

原文　凡そ千年の縁は二つ枕に結んだり。

改訂　凡そ千年の縁は嫩ながらに結んだり。

鳥羽繪

原文　巳待の晩の暗がりが、味な縁ではァ、有るまいか。

改訂　巳待の晩のあだつきが、味な縁ではァ、有るまいか。

紅葉狩

原文　ほんにお前を誰が抱いて、ぬるでの紅葉色見草、よその戀路のねたましや。

改訂　ほんにお前を誰が思ひ、ぬるでの紅葉色見草、よその戀路のねたましや。

僧正遍照

原文　嵯峨の后居に通ひ路の。

改訂　嵯峨の御殿に通ひ路の。

原文　分けて女犯は眼の迷ひ。

改訂　分けて女性は眼の迷ひ。

藤娘

原文

變らぬ契かい取褄で、よれつ縺れつまだ寢が足らぬ、よひ寢枕のまだ寢が足らぬ、藤にまかれて寢とござる、ア、何とせうかどせうかいな、わしが手枕お手枕。

改訂

變らぬ契搔取褄で、よれつもつれつまだ寢が足らぬ、宵寢枕のまだ寢が足らぬ、藤にまかれて居たうござる、ア、何とせうかどうかいな、わしが手枕お手枕。

亂菊枕慈童

原文

實に古は宮中にて、錦の褥玉の床、君が情の言の葉に、露の契を重ね菊。

改訂　實に古は起臥にも、錦の褥玉の床、君が情の言の葉に、露の契を重ね菊。

原文　高いも低いも色の道。

改訂　高いも低いも戀の道。

傀儡師

原文　綾や錦や金襴純子、折々事の睦言に。

改訂　綾や錦や金襴緞子、織りつむ業のその中に。

田舎神子

原文　色廓通ひ彈くや三味線の、見世清搔のたがひ違ひの床の中。

改訂　色廓通ひ彈くや三味線の、見世清搔にたがひ違ひの釣瓶縄。

蜘蛛拍子舞

原文　二人寢る夜は帶といて、屏風に掛しさゝ參る、ふたりがなかはゝ〳〵の寢姿に、ひぞりながらも夜着きせて、宵の笑ひは曉の、涙の露の起き別れ。

改訂　花に浮世の風厭ふ、屏風に古りし散し書き、床しき君へゝ〳〵の水莖に、偲び乍らも夢さめて、宵の笑は曉の、涙の露の起き別れ。

原文　九十四振は九十九夜、ある夜その夜の廓通ひ、色に亂れし業物と、名乘つて和泉の、加賀四郎。

改訂　九十四振は九十九夜、秋は百夜の里通ひ、色香久しき深草と、名乘つて和泉の加賀四郎。

原文　客は女郎に寸延びて。

改訂　客は榮耀に寸延びて。

原文　うちをさまりし床の山、しめて音じめの一ふしに。

改訂　うちをさまりし床の山、冴えた音じめの一ふしに。

晒女

原文　四つに抱れて手事とやらで、二人しつぽり汗かいて、なげの情の取組は、面白かろではないかいな。

改訂　四つに組む手をほどいてそして、ひき手押切り腕取り、投げの情の取組が、面白かろではないかいな。

伊勢音頭

原文　伊勢に内外の二柱、その妹と背の睦じく。

改訂　伊勢に女夫の二岩、その注連縄の睦じく。

原文　心まかせにひもとさて、上の下のと取る手も狂ふ。

改訂　心まかせにさゞめきて、上の下のと取る手も狂ふ。

原文　あかぬ契のあかしには、朱の唇。

改訂　あかぬ契のあかしには、朱の杯。

原文　實にや妙なる神わざを、初めたまひしにぎみたま。

改訂　實にや妙なる御神樂を、初めたまひし神いさめ。

廓丹前

原文　結んで解いた雲の帶、掛し屏風の雀形、比翼枕の曉に、鵲渡す天の川。

改訂　結んで締めた雲の帶、晴しゆふべの涼しさは、續く便の文月に、鵲渡す天の川。

原文　七夕さんのころび寢も。

改訂　七夕さんの言の葉も。

原文　やアしめろやれ締て寢た夜は枕が邪魔よヤア可愛〳〵の相槌の音。

改訂　やアしめろやれ締て寢た夜は砧が邪魔よヤア可愛〳〵の相槌の音。

原文　いとしけりやこそ、おいどをちつくり叩いた、ヨイ〳〵ヨイヤナ。

改訂　いとしけりやこそ、夜毎に褄戸を叩いた、ヨイ〳〵ヨイヤナ。

五郎

原文　色と戀との實くらべ。

改訂　色と香の實くらべ。

新柱建

原文　イザお床へと新造仲居も引汐に。

改訂　イザお部屋へと新造仲居も引汐に。

原文　蒲團の島に唯一人、今かくと船底の、枕の番に腹がたつ。

改訂　蒲團の島に唯一人、今かくと船足の、遅いは辛く腹がたつ。

原文　留てサアとまらぬ色の道。

改訂　留てサアとまらぬ汐の道。

花の友

原文　たてし誓のゆく末は、その姥口のふとん釜、二人しつぽり嬉しい中を誰が水さして。

改訂　たてし誓のゆく末は、その姥口のふとん釜、二人しづかに樂む中を誰が水さして。

たぬき

原文　山で寢る時や木の根が枕。

改訂　山で木を切りやこだまに響く。

原文　忽ち廣がる大金玉。

改訂　忽ち廣がる大巾着。

原文　綱の中途へ金玉を。

改訂　綱の中途へ巾着を。

千代の壽

原文　かはす枕の比翼の契。

改訂　交す言葉も千歳の契。

角兵衛

原文　ねまり地藏へ色の願。

改訂　ねまり地藏へ戀の願。

原文　夜まもひるまも三度ぐり。

改訂　夜間も晝間も三度栗。

兩國八景

原文　冬の夜ふけてさら〳〵と、ねて唐崎の夜の雨。

改訂　冬の夜更けてさら〳〵と、誰唐崎の夜の雨。

俄かしまをどり

原文　娘島田はサアねて解るヤレヨイヨイヨイ、娘島田はサアねて解る。

改訂　娘島田はサア解やせぬヤレヨイヨイヨイ、娘島田はサア解やせぬ。

原文　わしはこの臼お前は手杵、思ふ所をとんとつく、つくべとおもへど、そなたの顔見りや手をつく、臼と杵とのひやうしよく。

改訂　わしはこの杵お前は手杵、辛い稼ぎもなんのその、疲りよと思へど、そなたの顔見りや氣もつく、臼と杵とのひやうしよく。

花車

原文

忍の山の下紅葉、うすいは嫌よ戀ごろも、結ぶ縁しの神さんの、おなかうどではないかいな、今宵逢ふとの合圖はなんぞ、褄戸たゝかば誰そとも言はで、あけて霜夜の睦言も。

改訂

忍の山の薄紅葉、うすいは嫌よ戀ごろも、結ぶ縁の神さんの、おなかうどではないかいな、今宵扇の合圖はなんぞ、褄戸たゝかば誰そとも言はで、あけて霜夜の白扇。

まくら獅子

原文

忍ぶ枕やひぢ枕、思ぞこもる新枕、とんと二つに長枕。

改訂　忍ぶの宿や旅枕、思ぞこもる草枕、枕詞の長かれと。

今様春駒

原文　せめて一夜はなびけと申す。

改訂　せめて一目は笑顔と申す。

原文　九十九夜くよくどかばおちよ。

改訂　九十九夜くよ通はばおちよ。

里の四季

原文　ついたはむれの手枕に。

改訂　ついたはむれの酒事に。

座頭

原文　されて添寝の仇枕。

改訂　されて水鶏のほと〳〵と。

原文　今の浮世に一人寝せずに寝もせまい。

改訂　今の浮世に一人暮らすを見もせまい。

昭和十四年九月廿五日印刷納本
昭和十四年九月三十日發行

東京市京橋區西銀座七丁目四番地
長唄歌曲審議會
編輯及發行者　代表者　武藤良二

東京市麻布區谷町三十八番地
印刷所　渡邊印刷所

不許復製

發行所　東京市京橋區銀座西七丁目四番地
長唄歌曲審議會
電話銀座(57)五〇六五番